

1959年9月18日13-14時頃に宮古島台風によって生じた越波堆積物の堆積過程 Sedimentary process of small washover sediment due to storm surge

重野 聖之^{1*}, 七山 太², 石井 正之³

Kiyoyuki Shigeno^{1*}, Futoshi Nanayama², Masayuki Ishii³

¹茨城大学・院/明治コンサルタント(株), ²産業技術総合研究所, ³北海道地質調査業協会

¹Ibaraki Univ./Meiji Consultant, ²Geological Survey of Japan, AIST, ³Geological Association of Hokkaido

宮古島台風(昭和34年台風第14号, 国際名 Sarah)は, 1959年9月12日にグアム島付近で発生した後, 16日に沖縄県宮古島付近を通過し, 最低気圧908.4hPa, 最大風速53.0m/sを観測された。この台風は猛スピードで日本海を北上し19日未明に宗谷海峡に抜けたが, この際, 北海道南西部渡島半島西岸の爾志郡大成村(現在のせたな町大成区)では, 9月18日13~14時に最大波高6.2~7.0mを記録した。

本講演では, Nanayama et al. (2000) によって報告されたせたな町大成区平浜の弓山川河口沖積低地(標高3.8m, 汀線からの距離: 55m)において, 深さ1.5mのピット掘削を再度行って, 詳細な堆積構造と堆積過程を記載の見直しを行った。1959年越波堆積物は Unit T と Unit S の2つの堆積ユニット区分される。下位の Unit T は旧凹地形を埋積する含礫細~中粒砂からなり, 砂層にはアンティデューンや高領域の平滑床等のベッドフォームが発達する。上位の Unit S には2Dデューンが発達する。よって Unit S は Unit T よりも低領域の示唆することより, これらは台風による高潮営力の減衰によって生じた可能性が高く, 特に Unit T は台風接近による波浪最盛期頃(9月18日13~14時)に形成されたと考えられよう。

キーワード: 1959年宮古島台風, 越波堆積物, 堆積構造, 堆積過程, 粒度分析

Keywords: 1959 Miyakojima Typhoon, washover sediments, sedimentary structure, sedimentary process, grain-size analysis